“環境先進都市”目指す

人類愛善会創立記念講演会 桂川孝裕亀岡市長

人類愛善会創立記念公開講演会（人類愛善会、愛善みずほ会共催）「かめおかプラスチックごみゼロ宣言と実践項目について」が6月2日、京都府亀岡市の人類愛善会総本部で開催され、約140人が参加。桂川孝裕（たかひろ）亀岡市長と市の政策担当者が登壇し、これまでの経緯や今後の取り組みについて語った。

熱弁を振るう桂川孝裕亀岡市長

桂川市長講演〔要旨〕

亀岡といえば保津川が流れています。

2012年、私が京都府議会議員だったときに、亀岡市内にサッカースタジアムを建設することになりました。その際、国の天然記念物「アユモドキ」の保全といった、環境に関する意見をたくさん頂きました。

スタジアム建設の予定は遅れ、来年1月に竣工の予定ですが、「アユモドキ」を環境の一つのシンボルと捉え、17年に市の魚に指定しました。

亀岡は霧が多く、市民の方々は霧に対し、否定的な思いを持っておられる方が多いと思いますが、霧のおかげでおいしい作物が育ちます。霧は大地の呼吸であり、環境の一つのバロメーターと捉えています。

今後は、農業も有機農法へとシフトし、エネルギーの地産地消も視野に入れていくつもりです。

昨年には、かめおかふるさとエナジー株式会社を設立し、原発から自然エネルギーへの転換を図っています。

また、ごみゼロエミッション計画を立ち上げ、「プラスチックごみゼロ宣言」の活動を行っています。

保津川を多くの人々が観光利用しています。問題は、プラスチックごみ全体というより、使い捨てされるプラごみです。

台風などで増水した後には、ペットボトルなど、たくさんのゴミが目立ちます。保津川の清掃活動にこれまでかかわってくる中で、何とかしたいという思いを強く持っていました。

コンビニやファストフード店で飲食物などを購入した際のプラごみがポイ捨てされ、それがカラスについばまれ、風や降雨により結果的には川に流れこんでくるのです。

買い物の際には、マイバッグやエコバッグを持参してもらい、ペットボトルではなくマイボトルの活用、また、ウォーターサーバーの設置などを検討していく必要があると思っています。

今、海洋生物へのプラスチックごみが与える影響が世界的にも問題になっています。ごみ問題は待ったなしです。

亀岡市では30年までに、使い捨てプラスチックごみゼロ、自然環境の保全と地域経済の活性化に取り組む〝環境先進都市〟実現を目指しています。

20年までにレジ袋を廃止する条例を制定し、東京オリンピックまでに施行したいと思っています。

具体策の提言

①マイバッグ100％を目指す。

②プラスチック削減の趣旨に賛同し、基準を満たす市内の飲食店をリバーフレンドリーレストランとして認定する。

③給水機を設置し、マイボトル持参、ペットボトルごみ削減を目指す、いつでも、どこでも「亀岡のおいしい水」プロジェクトの実施。

④プラごみゼロにより観光産業や農業を発展させ、農産物のブランド力をあげるプラごみゼロでまちの仕事を応援するプロジェクトの実現を図る。

市長の講演後、山内剛亀岡市環境政策課長が具体的な今後の取り組みについて語った

■文化講演会・作品展

初代総裁の作品展示

初代総裁の作品に見入る参加者たち

NPO人類愛善会インターナショナル神奈川連絡所主催文化講演会・作品展「霊気のかたち」出口王仁三郎・すみこの芸術」が4月27日、神奈川県鎌倉市の鎌倉芸術館で開催された。参加者90人。

小林龍雄本会理事（人類愛善会神奈川協議会長）の開会あいさつ後、東京国立博物館研究員三田覚之（かくゆき）氏が講演した。

参加者からは、

「芸術を霊的視点で考える話がとても興味深く、楽しく聞けた」

「作品が生み出す力が、神からの流れを身に受け、そこからうみだされるということは感動的でした」

「〝見る者、使う者もその霊気を感じとることで、神の内流に触れ合う〟という話に大変感銘を受けた」

といった感想が寄せられた。

Jinrui Aizen
人類愛善新聞
季刊 夏号 7月1日
2019（令和元）年
編集：人類愛善会総本部
〒621-0851 京都府亀岡市荒塚町内丸1番地
電話：(0771) 56-9073
FAX：(0771) 25-0061
http://www.jinruiaizenkai.jp
発行：(株) 天声社
〒621-0815 京都府亀岡市古世町北古世82-3
電話：(0771) 24-7523
FAX：(0771) 25-3655
振替 01010-9-25757
http://www.tenseisha.co.jp
定価：1部150円
年間購読：1部500円
（送料・税込）
ご購読申し込みは天声社へ

Opinio

主張

エコバッグの活用を

プラごみ

5月、スイス・ジュネーブで、改正バーゼル条約が締約国により採択され、汚れた廃プラスチックが規制対象に加わり、その輸出入が2021年1月から制限されることになった。

わが国では6月、環境相がレジ袋無料提供を禁じる法制化に乗り出す方針を打ち出した。

人類愛善会総本部のある亀岡市でも、昨年12月、「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」を行い、20年までにレジ袋使用を禁じる条例を施行し、30年までに〝使い捨てプラスチックごみゼロ〟の町を目指すとしている。

プラスチックゴミによる海洋汚染が問題となる昨今、これらの動きは大変好ましいものである。

とはいえ、大量のプラスチックに囲まれて生活している現在、プラスチックを地上から完全になくすことは、現状では不可能に近いのではないだろうか。

その点、プラスチックを分解する研究を行っている、世界各地の大学や企業での試みは、注目に値する。

出口紅人類愛善会総裁は、昨年8月の出口王仁三郎本会初代総裁の生誕を祝う瑞生大祭で、

「大量のマイクロプラスチックによる海洋汚染をはじめ、その他さまざまな環境の問題も、元はといえば人類自らの利益や便利の飽くなき追求に起因するもので、現在の自然環境のみならず、子孫に引き継ぐべき未来の環境をも破壊し続けることに対する責任は、私たちが負うべきものであり、自分自身の日常の在り方そのものを問い正し、生活を根本的に見直さなくてはなりません」と述べた。

私たちにまず求められるのは、意識改革だろう。

身近なプラスチックが海洋汚染につながっていることを認識し、プラスチックゴミの削減に努めなければならない。

本会総本部では、月次祭の折、参拝者への神饌物のお下がりの野菜などを従来ポリ袋に入れていたが、これを紙袋に変更した。同様の取り組みや、プラスチックゴミゼロ清掃活動を計画している地方協議会も出てきた。今後、これらの動きを全国に広めていく必要がある。

出口紅総裁の染筆が染め抜かれたエコバッグも作成され、販売が始まった。ぜひ活用し、プラスチックごみゼロへ向け、良い型を積極的に出していこう。